

杜甫の思考形態と詩作

安東, 俊六

<https://doi.org/10.15017/2332760>

出版情報 : 文學研究. 70, pp.37-57, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

杜甫の思考形態と詩作

安 東 俊 六

序

従来杜甫は、社会の矛盾に激しい憤りをぶつけ、悪政下にあえぐ人々に深い同情を寄せ、自分の及ばぬ非力を自責しつづけた、誠実で善意にみちた詩人として高く評価されてきた。たしかに、社会の不公平を鋭く指摘し、国家の命運と人民の苦難に心を痛め、己の非力に焦慮して作った杜甫の詩は、全篇善意にみちみちているといつて決して過言ではない。しかし、こうした杜甫の詩にあらわれた善意を、ふつう言われてきたように、単に杜甫が性来正義感と善意の持主であったがためのものであると簡単に論断することがはたして妥当であろうか。

いま、誠実で正義感と善意にみちた詩人であるという従来の杜甫像が形成されるに至った過程を考えてみると、そこにははなはだしく偏向した恣意的な作品の選択が常に行われていることに気づく。つまり、従来幾多の人々が共感し愛読した杜甫の詩は、まさしく誠実さと善意とが横溢した詩篇であって、ある者はそれを詩作の手本とし、ある者は内的精神生活を向上させる徳育の資とし、またある者はこれらの詩篇を称揚することによって、自己の文学観ないしは倫理観の秀逸さを披瀝したのであった。そしてこうした従来の研究自体を直接の目的とし

ない、いわば鑑賞を主眼とした人々によって行われた恣意的な作品の選択からは、当然の結果として、誠実さと善意とに充ちた杜甫像が描き出されたのであって、この一面的な像こそが従来の杜甫像であった。したがって、杜甫の詩にあらわれた善意を、当のそれらの詩から形造られた杜甫像によって説明しようとするものが全く無意味であることは、今更詳しく述べるまでもないであろう。

では、従来 of 杜甫像が、杜甫の作品全般から自らイメージ化されてきた全体的な像でないとすれば、全体的な杜甫像とは一体どのようなものであろうか。そしてまた、杜甫の詩が善意に充ち充ちたものとなった要因は一体何なのであろうか。

結論を先に言えば、杜甫は一つの固定化した思考の型を根強く持っていたようであり、そしてその型にはまって固定化した思考のゆえに、杜甫の詩は必然的に善意にみちたものにならざるをえなかったように私には思われる。

小論は、こうした点を論証するために、杜甫の詩全般に目を向けながら、同時に行動の軌跡をも加味しつつ、杜甫の思考の形態を究明してみたいと思う。そしてこの考察を通して、思考形態と詩作との関連性を併せて考えてみたい。

一

杜甫の思考の形態を考えるにあたって、われわれにもっとも重要な示唆を与えるのは、杜甫の求仏の態度である。杜甫は、二十代の前半からすでに沙門と交遊を結び、仏教への傾斜を示しているが、五十代に入ってから

晩年の数年間は、殊に求仏の願いが切実であったようである。就中、大曆二年（七六七）杜甫五十六才の作「写懷」第二首では、「神を放つ八極の外、俛仰俱に蕭瑟たり。終然真如と契る、金仙の術に匪ざるを得んや。」と仏教こそ自分の心を和らげ、真理に到達する究極の対象ではなからうかと詠っている。この詩は、いかに熱望してみてもいっかな開けそうもない仕官の道、かといって隠逸生活に自適しようにもそれでもできない杜甫が、この逃げ場のない、絶えず不安定に動揺しつづける心を慰撫すべき終極の場として、真摯に仏教を求めたもののように理解される。とすると、最晩年の杜甫が仏教に帰依する態度こそ、彼の精神生活の最終的な帰着点の姿だといふことができるであろう。したがって今は、この求仏の態度を杜甫の思考形態をさぐる一つの手がかりとしてみよう。ところで、詩の中に求仏の願いが切実に詠われるのは、宝応元年（七六二・五十一才）から大曆二年（七六七・五十六才）にかけてであって、次の十例の詩句がそれである。

- (一) 願聞第一義 廻向心地初 金篋刮眼膜 伽重百車渠 無生有汲引 茲理儻吹嘘（「謁文公上方」詩）
- (二) 休作狂歌老 廻看不住心（「望牛頭寺」詩）
- (三) 白牛車遠近 且欲上慈航（「上兜率寺」詩）
- (四) 時応清盥罷 隨喜給孤園（「望兜率寺」詩）
- (五) 誰能解金印 瀟灑共安禪（「陪李梓州王閬州蘇遂州李果州四使君登惠義寺」詩）
- (六) 永願坐長夏 將衰棲大乘（「陪章留後惠義寺餞嘉州崔都督赴州」詩）
- (七) 問法看詩妄 觀身向酒慵 未能割妻子 卜宅近前峰（「謁真諦寺禪師」詩）
- (八) 晚聞多妙教 卒踐塞前窓（「秋日夔府詠懷」詩）

(ハ) 勇猛為心極 清羸任体屨 金篋空刮眼 鏡象未離銚 (「秋日夔府詠懷」詩)

(ト) 放神八極外 俛仰俱蕭瑟 終然契真如 得匪金仙術 (「写懷」第二首)

これらの詩句の中に、「法華經」や「涅槃經」・「楞嚴經」などいくつかの仏典をふまえた表現が含まれていることからみて、杜甫が仏典を博覧していたであろうことはほぼ想像に難くない。しかしながら、杜甫がいかに多大の仏典を博覧していたにせよ、また彼の求仏の願いが、これらの詩句から容易にうかがわれるごとくいかに切実なものであったにせよ、先に掲げた十例の詩句において、杜甫の論理は少くとも二つの点で大きく破綻をきたしている。

その第一は、例(七)「問法看詩妄 親身向酒傭 未能割妻子 卜宅近前峰」(「謁真諦寺禪師」詩)における論理の破綻である。「未能割妻子」という詩句から帰納すれば、妻子への眷恋を断ち切らねば仏道は求められないという論理に到達する。なるほど仏典には、釈尊が求道のために親や妻子をすてた話(註¹)がみえる。しかし、自ら帰依したことを詩に詠う(註¹)当時の禪宗、それも直接に帰依したと考えられる南宗禪(註²)では、すでにこうした論理をそのままには用いていない。南宗禪の祖・慧能大師の言行を著録した「六祖大師法宝壇經」疑問品第三に、次のような六祖の説法がみえる。――

善知識、若し修行せんと欲すれば、在。家。も。亦。得。寺。に。在。る。に。由。ら。ず。家。に。在。り。て。能。く。行。ず。る。は、東。方。の。人。の。心。善。き。が。如。し。寺。に。在。り。て。修。せ。ず。ん。ば、西。方。の。人。の。心。悪。し。き。が。如。し。但。だ。心。清。浄。な。る。こ。と、即。ち。是。れ。自。性。の。西。方。な。り。

この説法では、求道の行為が直接的に出家を意味せぬことを明言している。しかもこの説法は、西方浄土は地

理的な西方にあるのではなく、己の心の中にこそあるものだと言いつて、西方浄土を主張する浄土教に対してきびしい反駁を加えた部分であり、禅宗の対浄土教観をうかがうことのできる重要な説法である。こうした他教との教理の相違を明確にうち出した説法において明言される「在家亦得」という慧能の論理は、後の禅宗の一つの性格を規定する重要な意味をもっていたはずである。ところが、ここにもみる杜甫の論理は、自ら帰依したと明言する禅宗の教理に合致していない。そしてそれはただに禅宗の教理に合致していないというにとどまらず、いまかりに仏教を離れて広く人道的な立場に立つて考えてみても、経済的に安定しない情況のなかにありながら、妻と子供をうち棄てる行為は、人倫にもとる行為の最たるものであって、そこから人の道がひらけえないことは自明の理である。しかしながら、杜甫は自己の論理がもつとも原初的な肉親の愛とさえ抵触することを看過しているのである。これが杜甫の論理の破綻の第一の点である。

その第二は、例(九)「勇猛為心極 清羸任体屏 金篦空刮眼 鏡象未離銓」(「秋日夔府詠懷」詩)における論理の破綻である。「勇猛心の極と為すも、清羸体の屏きに任す」というここにおいては、体が弱いということが求道を阻む大きな要因とされている。しかし、杜甫が当時いかに体が弱っていたにせよ、求道という内的活動が阻害されるほどに重い症状ではなかったし、加えて、杜甫は自ら「心の極」となすという「勇猛」心の本質的な意味を理解していなかったように思われる。というのは、勇猛心とは、杜甫が考えていたような妻子をうちすてて出家をするとか、自分の病弱な肉体に堪えがたい苦行を強いるとかいった末節の形骸的な行為を行う勇氣をいうのではなく、むしろ、体が弱いから求道にふみきれないという、そのいいわけがまじさから脱脚して即座に求仏の道にはいることこそ、勇猛心の本体に他ならないからである。したがって、ここで殊更に体が弱いことをも

ち出すことは、仏道を求める機縁さえつかめていない自己を弁護するためのはなはだこじつけがましいいいわけであって、現実には、体が弱いこと自体が求道を阻害した直接の原因ではなかったと考えられるのである。だとすると、この杜甫の論理は、求道という形而上の問題に、極めて安易に次元の違った肉体の弱さをひき出してくるものであって、論理は破綻している。これが第二の点である。

ここで改めて先の十例の詩句を見直してみると、ここに詠われる杜甫の求仏の願いは、あくまでも観念論に終始しているように私には思われる。たしかにこれらの詩句からは、杜甫の求仏の願いの切実さをひしひしと感ずる。しかし、いかに仏語を多用して巧みな表現を凝してみても、杜甫の求仏の態度には、王維が朝廷を退くと香を焚いて座禅にふけたというような生活に密着した点が一向に見られない。そればかりか、求仏という自己の本質と最も深くかかわる根元的な問題においてすら論理の破綻をきたしている事実から推察すれば、杜甫の仏教のとらまえ方はあくまでも仏典の文句の鵜呑みに終り、その結果、仏教を自己の心を和らげる究極の対象として眼前に見すえながらも、どうしても跳入しきれぬままに、ただ理想としておいても、詩にひたすらにその願望を詠いつづけるという、現実の自己から遊離した観念的な思考を繰り返していたのではないかと考えられる。

二

ところで、こうした私の推測を更に確かにうらづける資料を今一つ杜甫の詩の中に見出すことができる。それは、ほぼ彼の生涯を通じて二律相背反する両極端の発言が著しく多いという事実である。処生の理念や文学・子

弟の教育などに関する発言にそれが見られるが、なかでも次にかかげる、出仕して政治に参与するか、あるいは退いて隱逸生活にひたるかという処生の方向の選択において、その発言の分裂的な現象はとりわけ顕著である。

ここで処生の方向の選択に関する兩極端の発言を詩の中から抽出して列挙してみよう。――

(A群)

- (一) 君を堯舜の上に致して、再び風俗をして淳ならしめん。(「奉贈韋左丞丈人」詩・三十七才)
- (二) 明朝封事有り、数々夜の如何を問ふ。(「春宿左省」詩・四十七才)
- (三) 時を濟ふに敢て死を愛せんや、寂寞壯心驚く。(「歲暮」詩・五十二才)
- (四) 濟世の策を陳べんと欲するも、已に老いたり尚書郎。息まず豺狼の闘ひ、空しく慙づ鴛鴦の行。(「暮春題漢西新賃草屋」第五首・五十六才)
- (五) 報主身已に老ゆ、入朝病みて妨げらる。(「入衡州」詩・五十九才)

(B群)

- (一) 向來橘頌を吟ず、誰か與に尊羹を討めむ。簪笏を論ずるを願はず、悠悠たり滄海の情。(「与李十二白同尋范十隱居」詩・三十四才頃)
- (二) 耽酒微祿を須つ、狂歌して聖朝に託す。(「官定後戲贈」詩・四十四才)
- (三) 我生れて性放誕、雅に自然に逃れんと欲す。酒を嗜みて風竹を愛し、居を卜するは必ず林泉。(「寄題江外草堂」詩・五十二才)
- (四) 荊扉麋鹿に對す、応に爾と共に羣を為すなるべし。(「曉望」詩・五十六才)

杜甫の思考形態と詩作

(五) 往に惠詢が輩と、中年滄洲の期あり。(「幽人」詩・五十八才頃)

これらの発言の何と立派なことであろう。A群の発言を見てみると——仕官を志して述べる政治の構想は、「君を堯舜の上に致して、再び風俗をして淳ならしめん」という高邁なものであり、官僚となつては、明朝の上奏を氣にとめて落ち着いて睡ることさえできないという勤直ぶりであり、野に下つては、いまだに天子の御恩に寸毫も報いることができないことを深く恥じている。真に高邁な政治理念をかかげて忠勤に励む、至誠一貫した愛国の士というに足る。

一方B群の発言を見てみると——生まれつきの性もちまへは放誕で、本来仕官する意志はなく、官についてもそれは酒手を得るためのこと、酒を嗜み風竹を愛して、神仙の世界に遊びたいという。これは、天命を楽しんで恬淡とした脱俗の人士の風姿である。

この両極の発言は、それを個別に見るかぎりにおいては、各々一点の非の打ちどころのない完璧な処生の理念に貫かれている。したがって、この両極端の発言を額面どおりに素直にうけとるならば、杜甫は、出ては忠節を尽し、退いては自然に自適する、出処の理に達観した人間であったといえる。しかしかりにこれとは全く逆に、出処のいづれにも終生執着しつづけたのであったとするならば、杜甫のこれらの発言は、精神生活の本質において、二律背反した大きな矛盾をはらんでいたことを露呈したものであるといわなければならない。とすると、これら両極の発言を、杜甫の単なる場当りな放言として見逃すことができないのは勿論のこと、この両方の発言のいづれもが共に杜甫の美点であるなどといった安直な見方は、ましてできないであろう。

はたして、杜甫は出処の理に達観した人ではなかったのである。このことをもつとも端的にものがたっている

のは、彼の生涯を通じて絶えず出処のいづれを取捨すべきか、その選択に迷った発言が詩中に見出されるといふ事実である。

垂老戎衣窄 垂老戎衣窄し

婦休寒色深 婦休すれば寒色深し

漁舟上急水 漁舟急水に上り

獵火著高林 獵火高林に著く

日有習池醉 日々に習池の酔有り

愁来梁父吟 愁来れば梁父吟

干戈未偃息 干戈未だ偃息せず

出處遂何心 出處遂に何の心ぞ

「初冬」と題するこの詩は、嚴武の幕下にあつた杜甫が、參謀の職を退くべきかどうかを思いめぐらしていた広徳二年（七六四）冬の作になる詩である。これと全く同様の迷いは、大曆四年・死の前年の詩「早發」にも見える。「薇蕨首陽に餓ゑ、粟馬歴聘に資す。賤子適從せんと欲して、疑悞す此の二柄」と、伯夷・叔斉の生き方をとるべきか、蘇秦・張儀の生き方に従うべきか、杜甫の迷執はこの期に及んでも尽きることがなかったのである。このようにこれらの詩句から、杜甫が決して出處の理に達していなかったことを容易に知ることができ、ここで更に詳細に、杜甫がいかに兩極のいづれにも密着していなかったかということを検討してみよう。

まず、「天子の恩に報いる」とか「時を濟う」とかいった行為の前提となるものは、官僚生活である。官僚と

してその任務を忠実に全うすることを除いて他に方法はない。そこで杜甫の官僚としての勤務ぶりを見てみると、たしかに先掲の「春宿左省」詩や「人を避けて諫草を焚く、馬に騎れば雞棲ならんと欲す」(「晚出左掖」詩)などからは、左拾遺の官にあった当時の杜甫の並々ならぬ精勤ぶりがうかがわれる。しかしこの精勤ぶりの陰にも、「退食遅回寸心違ふ」(「題省中院壁」詩)と詠ずるごとく、既に何かしら暗い影がさしているのがあって、忠君愛国の至情に支えられて孜々として政務に勉勵していたというにはいさかためらいを覚える、屈折した杜甫の心情が読みとれる。一つにはいまさらいうまでもないことながら、房琯を弁護して肅宗の逆鱗にふれたという負い目があったであろう。しかしこれにもまして杜甫の胸底に深い憂愁をわだかまらせたものは、将来の立身の明るい展望がこの愚直な事件によって閉ざされたことであつたと考えられる。一命を賭して鳳翔の行在所に奔り掌中に得た左拾遺の官は、品階が低いとはいへ、上奏文を奉る清資官であつて、杜甫の永年の宿願と符合した恵まれた官職であつた。そして四十六才にしてやつと掌中にしたこの清資官は、彼の宿願を充たし自負心を満足させたと同時に、これから先の出世の明るい展望をもたらしたのであつた。ところが、顧慮を欠いた忠義心からでたものであつたか、房琯とのつながりを保持するためにはやむをえざる行為であつたか、その真相の詮議は置くとしても、客観的にみて軽挙にすぎた杜甫のさしでぐちは、結果として、官僚生活のやつと伸びはじめた芽をそっくり摘みとってしまったのであつて、いかな杜甫でも、この事件から以後の官界における明るくない将来を予測できたはずである。予測できたからこそ、「飲を縦にし久しく判して人共に棄て、朝するに懶く真に世と相違ふ」(「曲江对酒」詩)と憂鬱を酒にまぎらせ、「東家蹇驢を借すを許すも、泥滑かにして敢て騎りて天に朝せず」(「偏側行」)と、雨が降れば参朝を怠るといつたずさんな務めぶりも時としてすることにるのである。

ところで、杜甫のこうした斑気の多いつとめぶりから考えられることは、杜甫は直面する状況を的確に把握してそれを踏まえながら、物事に地道に対処するという行動の着実性を欠いていたということである。つまり、高く掲げた自己の理念を実践化する最も恵れた情況が一たび悪化して道が閉ざされると、もはやそれを達成することは不可能であると見定めて居直り、悪化した情況の中にもそれに即した理念の具現化を真摯に追究するというひたむきさを欠いていたということである。このことは、彼の自負心を充たし、理念の達成の望みもてた左拾遺の官にあったほんの一時を除いては、官僚生活に全く意欲をもやしていなかったというあまりにも明白な事実によってうらづけられる。

四十四才で太子右衛率府兵曹参軍事に任ぜられ、やっとおそすぎた起家をはたした杜甫は、任官してほどなく、次に掲げる「官定後戲贈」と題する詩を作っている。

不作河西尉 河西の尉と作らざるは

凄凉為折腰 凄凉腰を折るが為め

老夫怕趨走 老夫趨走を恐れ

率府且逍遙 率府に且く逍遙す

耽酒須微禄 耽酒微禄を須つ

狂歌託聖朝 狂歌して聖朝に託す

故山歸興尽 故山歸興尽き

回首向風颺 首を回らして風颺に向ふ

この自負心に充ちた横柄なまでの高踏ぶりはどうであらうか。この心憎いばかりのゆとりたつぶりな姿は、いかにこれを杜甫の高雅をきどった一種のポーズだとみて大きく割り引いて考えたとしても、「朝に富兒の門を叩き、暮に肥馬の塵に隨ふ。残杯と冷灸と、到る處竊かに悲辛す」と詠じて、仕官の道を求めて贈賂する哀れな己が身を葦済に訴えた杜甫のイメージや、鮮于仲通に詩を贈って楊国忠に推挙を懇願するという無節操なまでに執拗な就職運動を展開した杜甫のイメージとは、あまりにもかけ離れており、到底重ねあわせがたい距離感を感じずにはおれない。しかしこれらは、多少の誇張はあるにせよ、いずれも杜甫の真実の姿であつて、ここにみられる両者のはなはだしい距離感こそ、杜甫が太子右衛率府兵曹参軍事の官職に全く魅力を感じていなかったことを如実にものがたつているのである。先掲の詩にみられるとおり、杜甫はこの官に任ぜられる以前に河西の尉に任ぜられてこれを拒んでいる。明経科や進士科の及第者でさえも県尉で起家するのがごく普通であつた当時の事情から考えると、進士科の落第者である杜甫が河西の尉を拒んで太子右衛率府兵曹参軍事に任用されたことは、彼が後に左拾遺という清資官に任ぜられたことを考え合せてみても、杜甫の起家はおそらくは門蔭による起家であつたと推測される。^(注3)であつてみれば、彼の仕官運動の真のねらいは、このことをふまえてはじめから清資官につくことであつたのであつて、太子右衛率府兵曹参軍事はいわば当然であるというよりもむしろ不足な官でしかないと思つていたと考えられるからである。性来自負心の強い杜甫は、本来ならば誰もが望んでやまない中央での起家解褐を果しながら、平生の目標を下回つたというだけの理由でこの官職に全く魅力を感じなかつたばかりでなく、この職を早くも去らんことを欲して、「去矣行」と題する詩を作っている。もちろん、「野人曠蕩として颯顔無し、豈に久しく王侯の間に在る可けんや」と詠ずる真意が、官界そのものからの逃避にあるのではな

く、志を得ない官職をなげうつことにあったことは想像に難くないが、しかしこうした杜甫の意に染まぬ官職では政務も怠り、すぐにもやめてしまうという官僚生活へのとりくみ方の甘さは、華州での彼の詩になお顕著に現れている。

七月六日苦炎蒸 七月六日炎蒸に苦しむ

對食暫餐還不能 食に対して暫く餐せんとするも還た能はず

常愁夜来皆是蝮 常に愁ふ夜来皆是れ蝮なるを

況乃秋後轉多蠅 況や乃ち秋後轉蠅多きをや

東帶発狂欲大叫 東帯狂を発して大いに叫ばんと欲す

簿書何急来相仍 簿書何ぞ急に來ること相仍るや

南望青松架短壑 南望すれば青松短壑に架す

安得赤脚踏層冰 安んぞ赤脚踏層冰を踏むことを得ん。

「早秋苦熱、推案相仍」と題するこの詩は、華州司功參軍事に出されて一カ月足らずのうちに作られたものであつて、華州での杜甫の失意のさまといらだちとを端的に知ることができる。左拾遺の官における房琯弁護の失策と時折みせたずさんなつとめぶりからすれば、彼の考課の成績は決してよくなかつたはずである。にもかかわらず、華州という輔郡の司功參軍事にとどまり、品階の上では従七品官へと昇進しているのは、やはり門蔭と清資官の前歴の強みによるものであらう。しかしこのように客観的に見ればむしろ恵まれていたといえる処遇も、宿願の清資官から一介の地方官に移官されたという精神的ショックの前には目に映らなかつたらしく、「推案相

仍」る事務の煩多な地方官生活を嫌悪さえしている。そしてほんの数カ月前まで鬱屈した心を酒にまぎらせ、参朝さえも怠ったその朝廷へ早くも復帰を懇望するのである。

至日遣興。奉寄北省旧閣老兩院故人

去歲茲晨捧御牀 去歲茲の晨御牀を捧ず

五更三点入鴈行 五更三点鴈行に入る

欲知趨走傷心地 知らんことを欲す傷心の地に趨走して

正想氤氳滿眼香 正に氤氳たる滿眼の香を想ふことを。

無路從容陪語笑 路無し從容として語笑に陪するに

有時顛倒著衣裳 時有ってか顛倒して衣裳を著く

何人却憶窮愁日 何人か却って憶はん窮愁の日

日日愁隨一線長 日日愁は一線に隨って長きを

ここに詠われるものは、不遜なまでの地方官への蔑視であり、その反動による極端に美化された中央官への憧憬である。華州に赴任するとき、房琯の失権を画策してその累を自分にも及ぼした一派の人々に、「移官豈に至尊ならんや」と怨みを込めて言い放った彼は、その舌の根の乾かぬうちにその朝廷への帰参を懇望し、その願いが一向にかなえられぬと判断すると、「官を罷むるは亦人に由る、何事ぞ形の役に拘せられん」（「立秋後題」詩）と傲然とうそぶいて、華州司功参軍事の職をなげうったのである。

華州での杜甫の詩にみられた不遜ともいえる地方官への蔑視と嫌悪とは、成都で嚴武の幕下にあった当時の詩

には更に顕著である。杜甫が嚴武のもとで参謀になったのは、一つには「暫く知己（嚴武）の分に酬」（「到村」詩）いるためであり、今一つには「稻梁には須らく列に就くべし」（同上詩）という生活のためであって、政治参与といった積極的な意図によるものではなかった。したがって仕官すること自体が深く彼の自尊心を傷つけたばかりでなく、「暁入朱扉啓き、昏帰画角終る」（「遣悶、奉呈嚴公」詩）という、全く属僚並みの勤務を強いられたことも杜甫には堪えがたいことであつた。加えて当時は持病の肺疾や消渴の他にも、足が痺れたり頭痛がしたりで、肉体的にも気ままに体を横臥させる自由を欲していた。しかし職柄そのものへの不満もさることながら、かつて清資官として朝廷へ出入したプライドを持つ杜甫にとって、幕下の同僚たちが自分の自尊心を満足させるに足る十分な尊敬を払わなかつたことは、何としてもがまんならないことであつた。「烈士は多門を惡むも小人は自ら調を同じくす。名利苟くも取る可くんば、身を殺すも權要に傍ふ。何か當に官曹清かるべき、爾が輩一笑に堪えたり」（「三韻三篇」第三篇）という口吻の荒々しさや、「憶ふ三賦を獻ず蓬萊宮、自ら怪む一日声烜赫たりしを。集賢の学士堵墻の如く、我の筆を落すを覩る中書堂。往時文采人主を動かし、此の日飢寒路旁に趨る。晩に末契を將つて年少に託す、当面には心を輸し背面には笑ふ。寄謝す悠悠世上の児、好惡を争はず相疑ふこと莫れ。」（「莫相疑行」）と年甲斐もなく昔日の自分を顯示して年少輩のあなどりに答える口吻の荒さも、それを腹にすえかねての所業であらう。

さて、このように太子右衛率府兵曹参軍事・華州司功参軍事・嚴武の節度参謀における杜甫のつとめぶりを見比べると、杜甫はこれらの官職のいずれにも意欲をもやしていかないばかりでなく、意に染まない官職はすぐにもやめてしまうという、ぬぐいきれない官僚生活に対するとりくみ方の甘さと、不遜ともいえる地方官への蔑視と

嫌惡とがありありとうかがえて、杜甫の究極の関心は、朝廷の頭要の官職にしかなかったことをはつきりと知ることが出来る。しかし現実には、頭要の官職に登用されることはおろか、その可能性すらなかったのであって、杜甫はこの現実の状況を全く無視していたといわねばならない。そして、現実の状況を的確に把握し、それに即した方策の追究を通して、理念の地道な具現化を計ろうと意図しなかったばかりか、地方官への蔑視と嫌惡に満ちた華州以後の詩にみられる政治参与への言辞の裏には、具体的な官僚生活のイメージさえ全くないのであるとすれば、先掲の詩句A群にみられるような、高邁な政治理念に貫かれた政治参与への発言は、現実から完全に遊離しながら觀念の世界で構築された理想論にすぎないのである。

一方隱逸生活においても全く同様のことがいえる。隱逸生活にとつぷりとひたりきるための第一の要件は、俗世とのかかわりを断ち切ることである。ところが杜甫の場合、すでに述べたとおり、現実から遊離した理想論であったとはいうものの、政治参与への未練を絶えず抱きつづけていた。ということは、隱逸生活にひたるための要件を決定的に欠いていたということに外ならないのであって、杜甫は、本質的に隱逸生活への道を閉ざされたといわなければならない。

ところで、隱逸生活にひたるための第一要件を決定的に欠いていたことが明らかになり、隱逸生活を不可能にした政治参与への綿々たる眷戀についてもすでに詳しく述べたからには、もはやその他の要因や、いかに隱逸生活にひたりきれなかったかという有様を、改めて述べる必要はないであろう。しかし、強いて、杜甫の隱逸生活をより不可能にした要因について付言しておくならば、秦州から以後の杜甫は、たえず有力者の經濟援助を受け

ていたために、時として心ならずも身を屈しなければならなかったという他律的な要因があげられる。杜甫に経済的な援助を与えたパトロンの代表的な人物は、成都における嚴武と夔州における柏茂林とである。勿論この他にも草堂の修理費を出してもらった王録事や、蜀を出て東游する際に旅費を乞うた射洪の李某・閬州で度々遊びに従った刺史の王某なども、彼の重要な援助者であったと考えられる。嚴武の平生の恩顧に報いるために、心ならざる幕府務めをしたことはすでに述べたが、柏茂林のもとでは官にこそつかかなかつたものの、遊びに従って詩を賦したり、柏氏一門がこぞって俊秀なることをたたえた阿諛に充ちた詩(注5)を作っている。杜甫は柏茂林から、柑橘畑四十畝を都合してもらったのをはじめとして「諸侯(柏茂林)数々金を賜ふ」(「峡口」詩第二首)とうたうごとく、月俸を割ってもらっている。また、西閬から赤甲に、赤甲から瀘西に、瀘西から東屯にと、わずか半年余の間に三度も転居し、その都度そこで果園や蔬菜園や水田を手に入れていることも、おそらく柏茂林の援助と無関係ではあるまい。かくて経済的にはかつてない安定した生活をおくることのできたものの、その代償として、不本意な交遊も余儀なくされたのであって、「肉食菜色を晒ひ、少壮老翁を欺る。况や乃ち主客の間、古来偏側同じきをや」(「贈蘇四偁」詩)と、他人の世話になっている我が身では、主人に本意なくも志をまげ、身を屈しなければならぬ息苦しさを、嗟嘆せねばならなかつたのである。

そして、こうした自律的・他律的な双方の要因が重なりあつて、隱逸生活が全く手のとどかないものになればなるほど、先掲の詩句B群にみられるように、執拗なまでに、観念的に絶対自由の理想境を思慕しつづけたのである。

こうして、杜甫の詩に彼の実際の行動を加味して総合的にみえてくると、杜甫の思考が、極めて観念的で現実の

情況を無視した、自己に密着しないものではなかったかという先の推測は、確實性を帯びることとなる。およそ杜甫の思考の形態は、理想と現実とのギャップを正確に把握し、そこから自己の行動すべき方向と手段とを追究するという、行動のための思考形態ではなかったのである。

ところで、杜甫の思考の形態をこのように理解したとき、杜甫の詩が善意にみちてくるのは当然の結果であるといえる。杜甫はたえず観念の上で極限にまで理想化した完全無比なものを追い求めていこうとするのであるから、詩を詠ずる場合の彼の視点は、いかなる場合でも常に、極限にまで理想化された頂点におかれている。したがってそれが不満を述べた詩であっても、綿々たるくりごとを述べた詩であっても、不満やくりごとを露骨にさらして見せることにはならず、高所に位置する彼の視点が、それに理念的なる過を与えてるのであって、その結果として、それは社会の矛盾を指摘するもの、人民の苦難に同情するもの、自分の非力を深く恥ずるものへと変形昇華されてしまうのである。このときこれらの詩が善意にみちあふれることは当然であって、そのわくからはみ出すことはありえない。しかし、こうした詩は、現実の自己をふまえていない以上、彼の描いた虚偽の像だといいかえることさえできるのである。さすれば、もはや誠実だとか善意だとかいった、倫理的な臭味の濃い人物評の立場に立って杜甫の詩をとらえることはできないであろう。

ここで念のためにことわっておかねばならないのは、私は、だからと言って、杜甫の文学が無価値であるなどと言おうとしているのではないということである。文学作品は、現実作者に密着していなくとも、たとえそれが全くの虚構であったとしても何らその価値を損じない。したがって、杜甫の文学において問われるべきものは思想の一貫性や倫理観の秀逸さではなく、文学を生む基盤となったこの固定化した思考のどうどうめぐりの中で

杜甫がいかに自己を作品の中に埋没させ且つ凝集させえたか、あるいは、現実と理想とのギャップの中で身動きのとれない自己をいかにリアルに表白しえたかという、文学表現の領域の問題であると私は思う。

三

杜甫の思考の形態が、理想と現実とのギャップを正確にとらえ、そこから自己の行動すべき方向と手段とを追究するという、行動のための思考形態でなかったことはすでに述べたが、こうした固定化した思考の形態は、詩作と深い関連性をもつものであったように思われる。この関連性を考えてみるにあたって、一つの重要な手がかりとなるものは、杜甫が自らの詩作の態度をいみじくも「愁極まれば本詩もとに憑りて興を遣る」（「至後」詩）と言っていることである。愁が嵩じて極まると詩を作って興を遣るという詩作の態度は、杜甫が常套的に用いた消憂の手段であつたらしく、表現こそ違ふけれども、「悶を排せんとして強いて詩を裁す」（「江亭」詩）といっているのもこれに外ならない。また杜甫の詩題に、「遺興」とか「遣愁」・「解悶」・「撥悶」・「散愁」といった詩題の詩が、四十数篇あることから、それを端的に知ることができるところで、詩作を消憂の手段として常に用いたことは、杜甫の現実即した思考を途絶させ、徒らに観念的な思考のみをくりかえさせるといふ、重大な結果を生むにいたつた。なぜならば、身に重くのしかかってくる問題の処理に苦慮し、一筋の解決の方策を追求して思索をくり返す際の苦痛と煩悶とを、そのままに詩に詠じて言語化し固定化してしまうことは、思考をその時点で中断させてしまうからである。杜甫のように年少の頃から經学を修め、道家の思想にも通じ、仏典も博覧している知識人にとっては、どのような問題を処理するにあたって、究極的な最良の結果を想定するこ

とは極めて容易である。むしろ難問であるのは、その最良の結果に到達するための具体的な方策を求めることである。到達すべき結果をあまりにも完全無欠なものとして想定できるがために、却って完璧で具体的な方策は求めにくい。到底到達することが不可能な状況下におかれた場合には、生半可な結果で妥協することには満足できぬままに、いたずらに苦慮して問題の処理を放棄さえしかねない、インテリ特有の弱さを露呈することもある。したがって、こうした具体的な実践の方策を追求して思索を重ねる過程において、関心の焦点を、心象を表現する方向にそらしてしまうことは、当然のことながら、思考の途絶をまねく。とすると、たしかに詩を作るという行為は、現実処理のための具体的な方策の追求の過程において生ずる苦悩から回避させうる。そしてひたすらに観念的な理想の世界に思いを遊ばせるならば、現実の苦痛を忘れ、理想世界に酔って、詩も自ら高雅な趣きを呈する。消憂の手段となる詩作とは、こうした効用をねらったものといえるであろう。

このように考えてみると、「陶冶詩篇に頼る」（「秋日夔府詠懷」詩）とか「性靈を陶冶する底物か存する」（「解悶」第七首）とか詠う、詩による性靈の陶冶とは、一見して考えるよりもはるかに次元の低い、後退的な消憂の行為であったと理解される。つまり、彼に描きうる手一杯の理想を詩に表現してみることによって、その境地に心地よくひたりきることだったのである。そしてこうした詩作による思考の中断のくりかえしは、自ら現実的な思考を束縛し、理想と現実とのギャップの前には、彼自身何ら対処の方策をもたない、身動きのとれない自己を見出すしかなく、その憂愁は、終生つきることがなかったのである。

注

1. 「余亦師蔡可 身猶縛禪寂」（「夜聽許十一誦詩愛而有作」詩）とか、「身許双峰寺 門求七祖禪」（「秋日夔府詠懷」詩）とかいった詩句がある。
2. 黒川洋一氏の「杜甫「秋日、夔府詠懷、百韻」における「七祖禪」についての考察」（四天王寺女子大学紀要・第一号）に詳密な論証がなされている。
3. 旧唐書・卷四三・職官志に、「凡出身非清流者、不注清資官」とみえる。
4. 「至徳二載、甫自京金光門出、間道歸鳳翔。乾元初、從左拾遺、移華州棧、与親故別。因出此門、有悲往事」詩
5. 「覽柏中丞兼子姪數人除官制詞、因述父子兄弟四美、載歌絲綸」詩